

「百人隊長の僕のいやし」

2015年06月11日

ルカによる福音書 7章1節～10節。イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに入られた。ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にかかっていた。イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに来て、部下を助けに来てくださるように頼んだ。長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」そこで、イエスは一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、百人隊長は友達を使いに来て言させた。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくありません。ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」イエスはこれを聞いて感心し、従っていた群衆の方を振り向いて言われた。「言うておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」 使いに行った人たちが家に帰ってみると、その部下は元気になっていた。

百人隊長はガリラヤに駐屯していたローマ軍の将校である。彼の部下（僕）が病気になる、死にかかった。主イエスは病気をいやすと聞いていたので、いやしを求めようとした。ところが当時、ユダヤ人は神を知らない汚れた異教徒とは口を利かない、まして、家を訪ねることなどは決してしなかつた。そこで彼は、ユダヤ人の長老たちに仲介を依頼した。長老たちは主イエスの下に来て「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです」と懇願した。武力で支配するローマ兵は憎しみの対象であったが、ユダヤ人を愛し、会堂まで建ててくれた百人隊長を好意的に受け入れていたのである。主イエスは求めに応じ、彼の家に向かった。その途中、百人隊長は別の使いを遣わし、言させた。「主よ、御足労には及びません。私はあなたを屋根の下にお迎えできない、私の方からお伺いするのさえ相応しくない者です。一言おっしゃって、私の僕をいやしてください。私も権威の下に置かれている者で、一人の兵隊に『行け』と言えば行きますし、『来い』と言えば来ます。部下に命令すれば、その通りにします。」主イエスは感心し「言うておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と言われた。使いの者が家に帰ってみると、その部下は元気に回復していた。主イエスは異教徒の求めに心を開いて応じ、癒しの奇跡を行った。

この記述は、言葉の権威を著したものであろう。軍隊は上意下達の命令によって動く。命令通りに動かなければ、戦争はできない。百人隊長は軍隊の命令と主イエスが語る神の言葉の権威をアナロジー（類比）に捉え、発せられた言葉はその通りになると信じた訳である。人を殺す軍隊の命令と人を生かす神の言葉を類比することに違和感を覚える。だから、この奇跡物語の意図は理解するが、抵抗がある。ただ、言葉の真実と力が失われている現在、言葉の回復が「共生文化」の鍵であると思っている。憲法九条の条文をそのままにし、解釈改憲によって骨抜きするなど、もつての外である。聖書は神の言葉、十字架の言葉が人間に真の救いをもたらす福音であると告げている。